3	2	1
4		
5	6	
7	8	

1　両軍の関係者から献花が行われた「仁」のこころを象徴する祭壇
2　挨拶する鈴木市長　3　哀悼の言葉を述べる藤道萩市長
4　安倍首相からのビデオメッセージ
5　祭文を読み上げる阿部家22代当主阿部正靖氏
6　県神社庁西白河支部による大祓　7　代表者による献花
8　クロージングセレモニーで慰霊の詩を朗読する紺野美沙子氏

白河戊辰150周年記念事業

甦（よみがえ）る「仁」のこころ　合同慰霊祭

7月14日、コミネスで「甦る『仁』のこころ　合同慰霊祭」が開催されました。
戊辰戦争で向かい合った東西両軍の関係者など全国各地から約1,000人が参列し、
犠牲となった先人たちに祈りをささげました。

今から150年前、奥州の玄関口として古くから主要な街道が交わる要衝であった白河では、空き城の小峰城をめぐり約100日間にわたる激しい戦闘が続きました。

当時の民衆は、この「白河口の戦い」で亡くなった千人余りの犠牲者を両軍分け隔てなく丁重に弔い、今もなお市内各所で香華（こうげ）が手向けられています。

相手を思いやり、慈しむ「仁」のこころを未来に受け継ぐ

合同慰霊祭には、山口県萩市や鹿児島市などの西軍側と、会津若松市や二本松市、仙台市などの東軍側の関係者のほか、ゆかりの藩主の子孫などが参列しました。

鈴木市長は「合同慰霊祭を契機に、関わりを持つ地域の交流が活発になることを期待する。地域の歴史を見つめ直し、『仁』のこころを持って未来を切り拓（ひら）いていく必要がある」と挨拶し、藤道健二（ふじみちけんじ）萩市長は「白河踊りがつなぐ縁を大切にし、先人の思いを次世代に伝えていくとともに、交流の進化に努めたい」と述べました。また、安倍晋三（あべしんぞう）首相はビデオメッセージで「白河の地から、近代日本を形作る一体感と融和の精神が育まれ、全国へ広がった。そして今日の日本がある」と先人の行いをたたえました。

式では、最後の白河藩主であった阿部家の22代当主阿部正靖（あべまさやす）さんが祭文（さいもん）を読み上げ、県神社庁西白河支部の宮司による大祓（おおはらい）の後、白河仏教会の僧侶による読経（どきょう）に合わせて、代表者が献花を行いました。

最後に、女優の紺野美沙子（こんのみさこ）さんが『慰霊の詩　ひともと桜より白河戊辰戦死者の御霊（みたま）へ』を朗読し、幕を閉じました。

これからの日本に必要なことを歴史から学ぶ

15日には、歴史家の加来耕三（かくこうぞう）氏、NHK　BSプレミアム「偉人たちの健康診断」の司会を務める渡（わた）邊（なべ）あゆみ氏を招き、特別講演が行われました。

また、講演した2人とNHK大河ドラマ「八重の桜」の脚本を手掛けた山本（やまもと）むつみ氏、鈴木市長を交え、シンポジウムが開かれました。『明治維新と戊辰戦争』をテーマに様々な意見が飛び交い、来場者は戊辰戦争の意義を考えるとともに、日本の未来について思いを巡らせました。（主な内容は17ページに掲載しています）